

研究課題	生徒の自己肯定感・コミュニケーション力を高め、居場所・絆づくりの構築についての研究
副題	～二校間・教育委員会の連携と ICT を活用した体験活動を通して～
キーワード	地域学習 コミュニケーション力 ICT活用 ウェルビーイング
学校/団体名	八戸市立豊崎中学校
所在地	〒 039-1109 青森県八戸市豊崎町字上七崎 1-1
ホームページ	<a href="http://www.hachinohe.ed.jp/toyosk_j/s_index.html">http://www.hachinohe.ed.jp/toyosk_j/s_index.html</a>

## 1. 研究の背景

本校は全校生徒数 26 名の小規模の中学校である。本市は小、中学校ともに児童生徒の居場所づくり・絆づくりに重点を置き、教育活動が進められている。本校において特に力を入れている教育活動にコミュニケーション力の育成が挙げられる。昨年度から、コミュニケーション・スキルの時間と称して、グループワークトレーニングを全校で学年関係なくグループをつくり活動を行っている。このような活動の背景には、地域の風土からの影響が強いと考えられるが、純粋で素直な生徒がほとんどであり、問題行動などを起こす生徒はもちろんいない。また、一生懸命に何事にも取り組める真面目な素晴らしい生徒たちに違いないが、自分の行動に自信を持ってない生徒が多い。情報を収集し調査を進めていくと本校生徒の自己肯定感は低いレベルにあることが分かった。自己肯定感が低い原因を探していくうちに、生徒たちの意見や行動の観察から次のような事が見えてきた。一つ目は本校生徒は控えめで謙虚さがあるが、謙虚さが変な形で伝わっているのではないかと。学年隔たりなく生徒は温かい雰囲気である本校であるが、発言や発表した事に対して他の生徒たちの反応は薄い。自信を持って発表した者は、反応の薄さに自信をなくし、発表者の話や意見を聴いて、意見することで発表者に対して自分の意見が失礼でないかと考えてしまうケースがあるとのこと。二つ目は幼少期から少人数の学校生活の故、今後大人数の中に自分が入った時にやっていけるのだろうかの不安であった。メインとなる研究の背景は、この二つを解決していくところにある。自信を持たせ、周囲とのコミュニケーションを自ら積極的にとることができることで、相手の考えや思いを知り、この経験から新しい見方・考え方を育てていく必要があると考えるからである。

## 2. 研究の目的

生徒の自己肯定感・コミュニケーション力の向上を目指すために本研究では、次の①～③を実践し、成果を明らかにする。①二校間交流（交流校の島守中学校の全校生徒数は 19 名）を通して、生徒の学校における「居場所・絆づくり」の構築を目指す。②教科横断型の学習を通して、地域に活動の発信を図りながら実践を行い、ICT 活用力と生徒の主体性を高めることを目指す。また、教育委員会と関係機関との連携を構築していく。③学校生活における幸福感（ウェルビーイング）の向上が二校間交流活動を通してどのように変化していくか関係機関（大学）と連携をしながら研究体制を構築する。

### 3. 研究の経過

前年度から、島守中学校と合同で行事を行うなどの交流があり、生徒たちは島守中生との交流を楽しみにしている様子が多く見られた。前年度中に両校で二校間交流の本格実施を話し合いながら教育課程内での位置づけを確認し、今年度の実施が実現した。(表1)

オンライン交流会を含め当初は5回の実施を予定していたが、それぞれの学校で実施する外部講師を招いての講演会などは日程が合えば、合同で実施することも含めて進めていくことにした。また、ICT関連の教職員への技術的な支援や指導については市の学校教育センターに依頼し、年度始めの新研究新体制では、弘前大学教育学部附属次世代ウェルビーイング研究センターの共同研究と講師派遣等の支援をいただけることとなった。次世代ウェルビーイング研究センターとの共同研究では、相手校の取組を知り、自校の取組を振り返り、改善策を考えることで、ウェルビーイングが高まる学校づくり(居場所づくり・絆づくり)ができるのではないかと。さらには、このような取組を通して自己の生き方を振り返り、これからの生き方を見直すことで、ウェルビーイングが高まるような取組を地域社会に広げていくことができるようになるのではないかと。の二つの仮説を立てこちらも合わせながら研究を進めることにした。

1回目のオンライン交流会が5月上旬に実施され、本校の生徒はとても楽しみしていたが、オンライン交流会が終了した後、上級生の口からは何故か「負けた」という言葉が聞こえてきた。1回目の交流の主な目標は、自ら積極的にコミュニケーションをとるであった。確かにオンライン交流会は無事に終了することができた。何故、上級生たちの一部はそう感じたのだろうか、早速、生徒が記入した振り返りシートを確認した。1回目の内容は学校紹介と自己紹介であった。次第があり、その通り進行した。後半の自己紹介は双方の生徒会が中心になって進めた。自己紹介も両校ともに工夫され、初回にふさわしい大変有意義な交流会であったが、どうやら本校の生徒は、後半の自己紹介において、島守中のアドリブ力に圧倒されてしまったようである。それで「次は負けない」と気合いが入った訳である。何だか妙な方向に進まなければ良いと少し心配したが、生徒たちは口々に「自分たちにコミュ力が足りない」と言っていたので、今回の活動を通して、多くの課題を発見することができた。(図5)

2回目は5月下旬に実施。大型バスで豊崎中生が島守中に移動した。島守中生が地域貢献活動として開校以来78年間続けている神社の清掃活動に参加し一緒に活動をした。この交流会での目標はコミュニケーションを図りながら、活動することはもちろんであるが、本校の生徒が自校にはない他の学校や地域の様子を知ること今回の活動の目的として取り入れた。両校ともに清掃活動は黙々と働く生徒たちばかりなので、教員側が期待していたほどの生徒間同士の会話やコミュニケーションを見ることができなかった。ただ、生徒たちは清掃活動を通して、さまざまな達成感を感じていたようであった。(図6)

3回目は6月上旬に実施。毎年本校で行われている表現活動の一環として、地元の高校生を本校に招聘し、合唱指導や演劇指導をお願いしている。来ていただいている高校は全国大会常連校であり、相当なレベルにある。前年度からすでにこの表現活動においては、島守中と一緒に表現活動を行っている。前年度と同じ、表現力についてどのように捉え、どのように生かしていくかを目標としている。本校、島守中ともに文化祭では全校演劇を行っている。小規模校

ならではの全校生徒がステージにあがれば、観劇するのは保護者、地域、御来賓の方々である。観てくださっているの方々を感動させようという目標は両校とも同じである。本校は文化祭に加えて、創立70周年記念式典を11月に挙げる。アトラクションとして、合唱と伝統の豊中ソーランを披露することから、生徒自ら積極的に活動する様子が見られた。高校生の圧倒的な表現力に大変良い刺激を両校ともにもらうことができた。(図7)

4回目は8月上旬にオンラインで実施された。夏休み期間中ともあり、今回は両校ともに全校生徒でなく、生徒会執行部のみの交流会とした。交流内容は両校が共通して行っている農園活動(農園体験活動)の進捗状況についてである。今回の目標は、相手によく伝わるプレゼンテーションの実施である。また、教職員の手をほとんど入れず、次第からICT機器の操作までのすべてを生徒の手で行うこととなっていた。ICT機器の活用技術は両校とも高いレベルにある。今回の交流会では、島守中生徒会代表者のプレゼンテーションは、本校生徒会が圧倒されるほど素晴らしいものであった。島守中のプレゼンに対し、本校の生徒たちはくやしきよりも、感動とプレゼンテーション力の大切さを実感していた。(図8)

5回目は10月上旬に実施。二校間交流の一番メインとなる収穫祭を行う日である。この日は島守中生に来ていただき、本校ではほぼ一日活動を共にする計画である。5回目の活動の詳細については、P4にて4の「代表的な実践」で報告する。

6回目の最後のオンライン交流会は、当初1月下旬の予定であったが、両校の諸事情により、3月中旬に実施することとなった。ここでは報告できないが、1年間の振り返りと次年度に向けた取組について話し合う予定である。

表1 令和6年度 二校間交流を軸とした研究の経過

時期	取り組み内容	評価等
R5年度 2月	二校間交流の実現に向けた取り組みと次年度の方向性を協議・検討、地域への発表	教員アンケート 地域からの助言
R6年度 5月	・1回目の二校間交流会の実施(オンラインでの実施) ・2回目の二校間交流会の実施(豊崎中→島守中へ)	生徒アンケート 職員の観察
6月 7月	・3回目の二校間交流会の実施(島守中→豊崎中へ) ・キャリア教育講演会(ウェルビーイングについて)	生徒アンケート 職員の観察
8月	4回目の二校間交流会の実施(オンラインでの実施)	生徒感想 職員の観察
10月	・5回目の二校間交流会の実施(島守中→豊崎中へ) ・文化祭における演劇	生徒、保護者、地域、 教員の感想
11月 2月	・豊崎中創立70周年記念式典 ・市の研究発表会にて二校間交流の研究について発表	生徒感想 参加者の意見感想
3月	・今年度の成果と課題について、最終評価の検討 ・次年度の組織、研究内容検討。	教員の相互評価 生徒自己評価

## 4. 代表的な実践

### (1) 二校間交流会 5回目『収穫祭』

5回目の交流会は、10月1日に本校にて開催された。二校間交流については、4月の始め本校で行われたコミュニティ・スクール会議（以下、協議会と表記）において、地域の方々に二校間交流の実施について目的と計画について説明をした。その後、協議会の方々にはオンライン交流会以外すべてに御案内をした。5回目の交流会までに協議会の方々が何度も学校に足を運んでくださり、生徒の活動の様子を見てくださった。前年度まで協議会の方々が来校されるのは、ほぼ主要行事のみであったが、今年度実施の二校間交流では、毎回数名の協議会の方々が来校された。それだけでも大きな変化と捉えることができる。今回の島守中との収穫祭では、本校の保護者を始め、協議会、研究協力機関の方々が参観、参加をしてくださった。

収穫祭の内容は①農園活動の成果と改善について（グループ協議）②ボッチャ大会・昼食会③いのちの講演会の三部構成で実施した。



図1 グループ協議の様子



図2 ボッチャ大会の様子



図3 昼食会の様子

図1のグループ協議では、両校の生徒が混じり自校の農園活動について目標と活動内容について説明をした。各校の上級生は数年経験しているので、課題と今後の取組について堂々と意見を述べている様子を見ることができた。本校の1年生については、現状について知ることが精一杯であり、自分の意見を述べている生徒は少数に留まっていた。

図2のボッチャ大会では1チーム6人で編成し地域、保護者、教職員を含め全12チームでリーグ戦を実施した。地域の体育振興会の方も参加、助言してくださり、大変な盛り上がりを見せた大会となった。コミュニケーションを一番とることができたのが、このボッチャ大会であったと両校の多くの生徒がアンケートに記述していた。

図3の昼食会は両校の農園で収穫した野菜を持ち寄り、本校の保護者にカレーライスを作っていた。午前中のグループ協議、ボッチャ大会を通して、両校生徒の緊張感がかなり減少された感じであった。特に上級生の動きはすばらしく、中には意気投合する生徒の様子も見られた。後のアンケートから、自分から進んで積極的に話すことができた生徒は大半に及ぶことがわかった。



図4 いのちの講演会の様子

図4のいのちの講演会は毎年講師を招いて、本校で行われる。今年度は、地域活性化のための発信活動家でアーティストでもある本校PTAに講師を依頼した。演題は「おもしろい風の吹かせ方」と題して、発想を大事にしながら、将来を強くたくましく生きていくこととお話された。学校においては「ガチャガチャ」(図10)を置くことで生徒の学校生活に多彩な変化を加えていくことができることを演習を行いながら提案をされた。

5回目の到達目標は、一つ目がそれぞれの中学校が、ICT機器を活用して、農園活動にどのように取り組み、何を学んだについてわかりやすく発表できること。二つ目は、相手校の発表を聞くことで、自校の取組を振り返り、自校の取組の良さや改善点をなどを考えることができること。三つ目は、両校の生徒が混在したチーム編成でボッチャを実施することで、積極的にコミュニケーションを図りながら交流することができること。四つ目は、いのちの講演会を聞くことで、自分自身や仲間のいのちの大切について改めて考えることができること。を設定した。特に三つ目の目標に対しては両校ともに生徒のアンケート始め、職員の観察や地域、保護者の意見より到達目標を達成することができたと考える。

## (2) 二校間交流を通してこの1年間の実践の様子

今年度は二校間交流にも取り組んだが、本校は小規模校ならではの特色ある教育活動として、例年、多くの体験学習を取り入れている。これら従来の活動においても表現力やコミュニケーション力向上を意識した活動となっている。p 2と p 3で前述済である5回目以外の二校間交流会の様子と二校間交流の目的・目標との関連を図りつつ、今年度取り組んだその他の活動についても紹介したい。



図5 1回目の交流会の様子



図6 2回目の交流会  
神社の清掃活動の様子



図7 3回目の交流会の様子

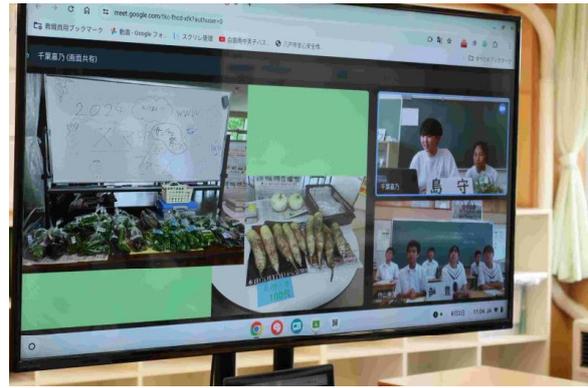


図8 4回目の交流会の様子



図9 キャリア講演会の様子



図10 島守中ガチャガチャ活用の様子  
(ガチャガチャは両校に設置済)

本校でキャリア講演会を実施した。(図9)二校間交流を実施後の成果や効果については、弘前大学教育学部附属次世代ウェルビーイング研究センターとの共同研究を今年度から進めている。学校における生徒の幸福感(ウェルビーイング)の考え方などについて大学の特任教授が来校し、授業(講演会)を行った。このキャリア講演会では、豊崎小学校の5、6年生が来校しこの授業と一緒に参加をした。また、協議会の方々もウェルビーイングについて知りたいということで数名の方が来校された。知らなかったことを知ることができ、また、児童生徒ともに自身の日常を振り返るきっかけになったとの感想が多かった。



図11 ドローンで空撮した校舎全景

三回目の交流会では清掃活動の様子をドローンを使用して撮影した。この時は職員がドローン操作を行った。撮影した映像等は両校で共有した。生徒にもドローンについて操作の技能も含め、主に技術の授業(エネルギー変換、情報の内容)で学ばせた。

図11の校舎全景については、70周年記念誌に載せることができた。

## 5. 研究の成果

本研究で成果を確認したいのは、研究の目的からの①～④の四つである。

- ①生徒の自己肯定感・コミュニケーション力の向上。(表2)
- ②生徒の学校における「居場所・絆づくり」の構築。(表3)
- ③ICT活用力と生徒の主体性を高める。(表4)
- ④学校生活における幸福感(ウェルビーイング)の向上が二校間交流活動を通してどのように変化していくか関係機関(大学)と連携をしながら研究体制を構築する。(表5)

スタートアップセミナーでは本実践研究の評価方法については、次のような助言をいただいた。「児童生徒の活動の様子や生徒の声、感想(アンケート等)、対話などを重視、児童生徒の変容や変化を指導者(教職員)が見極めることが大切である。」このことから、評価方法については、[生徒・保護者・地域へのアンケートと対話の記録]、[職員の観察による変容について研修会議での話し合い]をメインとした。アンケートでは[交流会後の自己評価と感想等]、[年2回の学校評価アンケート]、[ウェルビーイングの指標に基づくアンケート]、[学校環境適応感尺度(アセス)]から生徒の変容等を読み取ることとした。

表2 ①の成果について

1年間の活動を通してコミュニケーション力が高まったと実感している生徒数について (主に職員の観察と生徒の自己評価より)			
3年生	8名中	→	6名
2年生	8名中	→	7名
1年生	10名中	→	3名
計	26名中	→	16名

表4 ③の成果について

学校情報化システムの診断結果より	
R6.5月当初の診断結果の平均値	1.45
R7.1月の診断結果の平均値	2.21
	0.76の上昇

表2～表4から①～③について成果が出ていると言える。しかし、①の1年の結果については、成果として出ていない。また、1年生アセスの生活満足度は、6月実施の学級平均値4.4から12月実施の4.5と大きな変化が見られず、学級、生徒個々への今後の対応について学校としての課題を改めて再確認する必要がある。他学年の変化も同様であった。

- ・2年生アセスの生活満足度の学級平均値 6月実施 5.7 → 12月実施 5.4
- ・3年生アセスの生活満足度の学級平均値 6月実施 5.4 → 12月実施 5.4

表3 ②の成果について

学校評価アンケートの重点項目より			
◆生徒は学校に生活が充実して楽しいと感じている(肯定的回答) 前比			
R5年度	生徒	→	70% ↓
	保護者	→	67% ↓
R6年度	生徒	→	87% ↑
	保護者	→	87% ↑
◆自分と他の人を大切にする気持ちを持ちながら、学校生活に取り組んでいる			
R5年度	生徒	→	—%
	保護者	→	—%
R6年度	生徒	→	96%
	保護者	→	84%
◆他の人との考えの違いや個々の良さを認めて協力体制をつくっている			
R5年度	生徒	→	92% ↑
	保護者	→	96% ↑
R6年度	生徒	→	96% ↑
	保護者	→	88% ↓

表5 ウェルビーイングの測定指標 弘前大学次世代ウェルビーイング研究センターより

獲得的幸福の肯定的回答	豊崎中	島守中
a 私の中学校生活はとてもすばらしい状態である	80%	94%
b 私の中学生生活は、大体において理想に近いものである	76%	83%
c これまで私は、望んだものは手に入れてきた	60%	44%
協調的幸福の肯定的回答	豊崎中	島守中
d 自分だけでなく周りの人も楽しい中学生生活だと思う	88%	88%
e 私は大切な人を幸せにしていると思う	76%	72%
f 私は平凡であるが安定した中学校生活を過ごしている	80%	94%

表5については二校間交流が始まった5月から活動などを重ね、11月末において両校にアンケートを実施した。両校ともに似た結果となっているが、島守中の方が肯定的回答の平均が高くなった。本校においては上級生においては肯定的回答が多かったが、1年生においては肯定的ではない回答が若干見られた。アセスの結果とリンクしているようにも感じられるが、この点については、今後さらに読み取りの研究が必要であると感じた。両校のアンケートの自由記述の所から、上級生ほど、貴重な体験に満足しており、学校生活が充実し楽しいと記述している生徒が多く見られた。したがって、④の成果については概ね達成したと評価する。今年度はウェルビーイングアンケートは1回しか実施しなかったが、次年度は2回実施したい。

## 6. 今後の課題・展望

本市教育委員会が主催する令和6年度教科等研究・国内研修発表会にて本研究について1年目の取組として発表をした。本市は中学校区をくくりとして、小・中学校間連携事業を盛んに行っている。しかし、小学校間や中学校間の連携事業はこれまではなく、発表後は大反響であった。二校間交流の成果だけでなく、大学とのウェルビーイングについての共同研究による成果も大変興味深いものとなった。今後の課題として、研究がより大きく充実したものになっているが、今年度は、校長が企画・計画・渉外・実行・報告書等作成等のすべてを行った。次年度は、管理職ではなく、教職員全員で子どもたちの成長を楽しみながら進めてほしいと考えているが、うまく引き継いでいけるかどうか心配な面がある。今後の展望としては、本市には本校と同規模の中学校が三校あり、次年度は三校間交流に取り組むことが決定している。

## 7. おわりに

地域への発信により、また、地域の方々も一緒に参加することで、二校間交流の取組の様子や成果について、地域にも広めることができた。地域の方々に興味をもっていただくことで、より充実した研究に繋がることを期待される。次年度の三校間交流をより工夫しながら取り組んでいきたい。

## 8. 参考文献

- ・ 栗原慎二・井上 弥 編著（2010）『アセスの使い方・活かし方』ほんの森出版